

2回目のブリュッセル

(2013年9月8日出国、9月14日帰国)

6年前、2007年について2回目のブリュッセル。小パリといった雰囲気では僕は好きな街だ。前回 (<http://www5f.biglobe.ne.jp/~pinawa92/bunsho/2007GermanBelgiumFrance.pdf>) と違うところは、前回はドイツからフランスへ抜ける途中の休暇だったが今回は仕事で、ロクに観光をしなかったこと。それと、最近の旅行記と同じくこの旅行記もかなり脱線。Wikipediaには大変お世話になりました。ブリュッセルの観光情報はウェブでたくさんヒットしますのでこちらをご覧ください。次回は観光で出掛けておいしいものを漁りたい。

9月8日(日)

いつもの高速バスに乗って成田空港へ向かう。水戸を出るときに今にも泣きそうな曇り空だったのが、バスに乗っている間に本当に泣き出した。今日は西から雨が迫って来ていた。天気予報の通りだ。

成田でバスを降りてみたら同僚が3名、かつての上司が1名。それぞれパリへ3名、イギリスのBrightonへ1名。バスは満席に近かったし、出張日和か。

今朝は日本は歓喜の朝だった。東京は2020年オリンピックの招致に成功。プエノスアイレスで開かれていたIOC総会の様子は昨夜から夜を徹してTV放映していた。マドリードとイスタンブール相手に圧倒的有利と思われていたのが、福島の汚染水問題で雲行きが怪しくなっていた。それが蓋を開けてみるとやっぱり東京が圧倒した。日本のプレゼンに対して発せられた質問に対する安倍総理の回答がよかつたらしい。オリンピックの着実な開催にはやはり東京の社会的経済的安定度が欠かせないのだ。2020年は今から7年後。7年後に社会や経済がどうなっているかわからないが、安定していると言うことは7年後も予想が立つということなのだろう。ともあれ素直に喜びたい。

ブリュッセルへはエールフランス航空でパリに入り、そこからTGV Thalys (タリス) でブリュッセルへ向かう。

成田では第1ターミナル北ウィング。何ともまあ今日の成田は混んでいる。チェックインに長蛇の列だ。荷物を預け、搭乗券を受け取る。搭乗券はパリーブリュッセルの列車の切符の引換券を兼ねている。フランスでは国鉄とエールフランスが提携して旅行者に至極便利だ。どちらも国が運営しているからだろうか。成田に新幹線が乗り入れているようなものだが、成田は成田で東京への接続がどんどん便利になっている¹。

¹ 因みに、昔「成田新幹線」構想というのがあった。以下、近藤正高『新幹線と日本の半世紀』(交通新聞社新書)とWikipediaより。

鉄道立国論者であった田中角栄が自民党幹事長時代、「全国新幹線鉄道整備法」の下、既設の東海道新幹線、工事中の山陽新幹線の次の3路線が自民党有力政治家の独断専行で決まった。東北新幹線(東京-盛岡)、上越新幹線(東京-新潟)、そして成田新幹線(東京-成田)である。偶然なのかどうか、この3路線はそれぞれ自民党三役である総務会長の鈴木善幸、幹事長

成田空港での搭乗ゲートは15番。場所だけ確認して海外旅行保険とユーロを買いに行く。

海外旅行保険。クレジットカードに含まれているから毎度の旅行で保険を買ったことはない、と同僚は云っていた。多くの人はそうみたいだ。僕は今まで渡航のたびに買っていたので、今回はクレジットカードの保険を調べてみた。昨夜ウェブサイトにあたってみたが、結論から言うと、僕が所有しているいくつかのクレジットカードでは×で、結局今回も空港で買うことになった。

多くのカードは、日本出国前に公共交通機関の支払いを当該のカードですることによって有効になる。渡航先到着直後でもよいカードもある。

ただし、提携カードは要注意みたいだ。僕の三井住友提携のUNICEFカードは「対象外」とホームページにはっきりと書いてあった。それから3枚も持っているJR東日本のVIEWカード。VIEWカードは上記の使用条件がない。カードを持って

の田中角栄、政調会長の水田三喜男の地盤を通っていた。

成田新幹線は他2線に遅れて1974年2月に着工。東京駅地下ホームから江東区の越中島付近で地上に出たあと、千葉県が開発を進めていた千葉ニュータウンを経由して、当時まだ建設中だった新東京国際空港(現在の成田空港)を結ぶ路線として計画された。途中駅は千葉ニュータウンのみ。ノンストップならば東京駅-成田空港を30分、千葉ニュータウン停車ならば35分。

この計画に対し、沿線住民から騒音公害や建設による地域分断への懸念から反対が表明された。用地買収も進まず、始まった工事の一部区間でのみで、結局1983年に中断、1987年の国鉄民営化で計画自体が失効した。

その後、当時運輸大臣の石原慎太郎の指示により、京成電鉄とJR東日本が空港ターミナル地下へ乗り入れるようになった(1991年3月19日)。空港駅の地下ホームや成田市内の高架部分は新幹線用に完成していたものである。また新幹線が発着予定だった東京駅地下ホームは現在、京葉線が使用している。

2010年には、東京と成田空港を結ぶ新たな空港アクセスルートとして成田空港線(愛称:成田スカイアクセス=東京都葛飾区の京成高砂駅と千葉県成田市の成田空港駅を結ぶ鉄道路線)が北総鉄道北総線を延伸する形で開業し、京成特急「新型スカイライナー」が日暮里~空港第2ビルを最短36分で結ぶようになった。まぼろしの成田新幹線の35分とほぼ同じ。ちなみに、成田エクスプレスは東京近郊の各都市から集客し、東京駅-成田空港駅間は最短53分。

なお、成田空港開港当初、東京へのアクセスが悪く成田空港は外国客から評判が悪かったが、それは当時空港に乗り入れた鉄道は京成電鉄のみで、「成田空港駅」とは言うものの、空港から離れた現在の芝山鉄道・東成田駅までだった。ターミナルに乗り入れる列車は新幹線のみとされていたから。ターミナルへは成田空港駅からバスに乗り換える必要があった。

いるだけで適用となる。しかし、カバーするのは死亡、病気、怪我だけで、それらの補償額は結構低い。

楽天カード。出国前の交通機関の支払いをこのカードですればいいわけだから、僕の場合唯一の公共交通機関、高速バス「ローズライナー」の料金 3,000 円を楽天カードで支払えばいい。と思って早速バス会社に電話し確認。「現金のみです」。

かくしてやっぱり今回も空港で一式買うことになったのだ。今回はJ傷害火災保険を自販機(?)で買った。もっとも海外で心配なのはけがと病気で、これさえある程度カバーされていればいいのかも知れない、VIEW カードでもよかったかと後で思う。

両替。出国審査前の出発ロビーの両替所はどこも長蛇の列だったので、出国審査後と思ったのだが、ここもやっぱり列。2万円を換金する。1ユーロ 137.18 円だから、2万円でも 140ユーロにしかない。円安進行中だったね。

毎日のことだが早朝に軽く朝ご飯を済ませてくるだけなので、空港で過ごしているうちに小腹が空いてくる。ラウンジでサンドイッチを頬張りコーヒーを流し込む。

予定から少し遅れて搭乗開始。定刻 11:55 より 10 分早い 11:45 を出発時刻とするというアナウンスが流れたが、この目論見はひとり遅刻してきた乗客によりご破算となり、結局 12 時を過ぎての離陸となる。

機体は Airbus 380。思いがけずついにお目にかかることになった。総 2F 建ての 2F 席だ。さすがに機内は広い。昔のジャンボジェットより明らかに居住性はいい。席は 2 席×3 列の真ん中の列。

座席前の背もたれにビルトインされているディスプレイは大きく、使いにくく反応が鈍いリモコンだけでなく、パネルタッチで操作できる。提供されるコンテンツは豊富だ。たとえば映画 (cinema) は、最新リリース、最近の映画、コレクション、ワールドムービー、アニマルムービーと別れて収納されており、どうやらホテル並みに多くの作品から選べる。それに言語別にリストを示してくれる機能もあって助かる。

地図やフライトコースや到着時刻などの情報は定番だが、機体の 3 か所のカメラがとらえるライブ映像を終始観ることができる。機体から前方に向いた nose camera、尾翼頂上から機体の背中を見降ろすように映す tail camera、そして機体下方をとらえる down camera だ。down camera は真下の光景を映すから上空では雲が映って始終真っ白だ。Nose camera もほとんど雲を映すばかり。定番の地図は、“Total Route”、“Day/Night”、“Autozoom”、“High Resolution”といろいろ用意されている。

正午に離陸だから離陸後早速食事。「子」と「仔」はどう違うのだろうかなどと思いながら、仔羊フィ

レ肉の粒マスタードを食べる²。それにしても、高脂血症治療薬「ゼチーア」は離せないね。

上に書いたようなエンターテイメントを前にして、実は機内では専ら仕事だった。仕事の書面を読むのと、何よりもプレゼンの準備。スライドも原稿も書くだけ書いて印刷してもってきたが、練習などしていない。ひたすら読みこむ。読んでいるうちにスライドにも原稿にも修正が入る。また読む。

白ワインのお陰で読んでいると眠くなる。しばし眠って起き出して読む。集中できてないなあ。

実は左隣の男性もほとんど同じような作業をしていた。トイレに立ったときチラッと観ると一番前の席の若い男の子も同じことをしていたし、僕の前の席の男性もたぶんそうだ。皆同じようだ。昔若い頃は発表原稿も練習も仕事場で片づけて来て、飛行機の中で作業をすることなんてなかった。今は皆普段忙しいのか。そう言えば前回ブリュッセルを訪れたときの旅行では、その前のドイツのホテルで、前日の深夜まで電子メールで日本からデータを取り寄せながらスライドを作っていた。

持参してきた「フクシマと海—Fukushima and the Ocean—」という冊子を読む。米国のウッズホール海洋研究所 (Woods Hole Oceanographic Institution ; WHOI) と東京大学大気海洋研究所が、2012 年 11 月に海洋、健康、政策、経済、メディアの各分野から 90 名を招いて東京で行った同名の公開シンポジウムのまとめで、WHOI の機関紙「Oceanus」の第 50 巻第 1 号として発刊したものである。海底動物中の Cs 濃度が下がらないのは、継続的に汚染水が放出されているからではないかと推測しているが、今やそれが明らかになった。

ロンドン条約は船舶からの放射性物質投棄は禁じているが陸からの放出は禁じていない (各国とも自国領土内に規制を受けることにとっても消極的であること表れ) こと、東北沿岸漁業の再興とは競争力のある新たな水産業を生み出すべきであること。そして科学者の役割。科学者が黙ってしまっただけで役割を果たさなかったという指摘に反論の余地もない。

気が付くとパリまであと 2 時間だ。ほとんど眠れなかった。

間もなくパリという頃に隣の男性に声を掛けてみる。聞けばパリで TGV に乗り換えてブリュッセルまで行くと言う。同じ用事かと思っただ、そうではなく水素関係の国際会議らしい。お互い初めての行程で、ともあれ心強い。

² 「子」と「仔」。「仔」と言う漢字は本来は人間が飼育している家畜の子供に使う漢字だそう。『仔猫』の「仔」の文字が示すように人 (飼い主) が幼い猫の世話をするとする意味にもなる。「仔」は今でも中国語で「家畜や家禽の子供」の意味で使われていて、例えば、仔猪は子豚。本来の親以外の存在である「人」が世話をする動物の子供だから、人の「子」と区別する意味も含めて「仔」となったのでしょうか。

<http://q.hatena.ne.jp/1163987477>

9月8日ほぼ定刻(1715)にシャルル・ド・ゴール空港に着陸。下降中、雲の中を通過している間は激しく雨が機体を打っていたが、雲を抜ければすっかり上がっていた。tail cameraの映像を最後の最後、着陸まで眺めていた。



繰り返すが A380 はほんとにデカイ。空港内に入って通路を歩きながら写真を1枚(←)。通路には両側に夥しい数の団体旅行者がツアコン

の持つ旗の下に集まって全員が揃うのを待っている。これじゃ成田空港の両替所も混むはずだ。9月中旬、旅行シーズンなのだろうか。パリコレの狭間で料金が不高くないのか³。

長い長い通路を歩き、同僚と一緒に荷物取り場(Baggage claim)へ。荷物を取り上げると機内で隣の席だった水素の男性が待っていてくれた。

ここからのTGVへの乗り換えは初めてだ。彼によると空港駅内の国鉄の駅まではバスが走っているらしいが、建屋内を歩いて行く方が早いのではないかと。案内盤に従ってまっすぐまっすぐ歩くと駅に到着。

緑色のきれいな切符売り場に入り、人の列に並ぶ。意外と早くさばけて、窓口の男性にフライトチケットを差し出すと、「…これはこの場所じゃない。ここは郊外電車のチケット売り場で、エールフランスの窓口へ行ってくれ。一旦外へ出て回っていくんだ」と。切符売り場の外に出てみると隣に小さな事務所のようなブースがある。ここでTGVのチケットを受け取る。

成田→ブリュッセルの往路は、パリまでのフライトとパリからブリュッセルまでのTGVを予約したから、成田からパリへのフライトチケットにはすでに乗り継ぎのTGVも印字されている。AF 7187という、フライトと同じような番号が列車に振ってある。コードシェアというのか。ブースでフライトチケットを差し出せば、予約した席の番号が入ったTGVの乗車券をくれるのだ。19:08発、AF 7187、1等車(class Y) 62番だ。

乗車時刻までには1時間以上ある。駅構内をブラブラし、小銭整理の目的もあってコンビニでパリの地図を買い、1時間経って事務所へ出向く。1時間前になると事務所の前で荷物を預けることができるのだ。

TGVは予め乗車プラットフォーム(Truck)が決まっているわけではない。到着15分ほど前に掲示

されるので、掲示板を眺めていることになる。Truck 5とわかり降りて行く。日本の新幹線は基本高架だから大抵プラットフォームに「上がっていく」。ここは「降りて行く」。



パリから北へ、ベルギー、オランダ、ドイツへ向かうTGVは、上の写真にあるように、赤い車体で有名なタリス(Thalys)だ。Thalysの特徴は(技術的に難しい話は知らないが)何と言っても運転台が中央にあることだろう。国によって複線区間の通行方向が異なるからだ。フランスとベルギーは左側通行、オランダとドイツは右側通行である。

パリーブリュッセル間では行先の異なる2編成を併結することがあるが、われわれが乗ったのはこれだった。以外にも2編成とも赤い車両ではなかった。こういうこともあるのか。

前回ブリュッセルからパリに向かって乗ったときは、2等車で、おまけに車両番号が順番でなくて、混み合う通路を荷物を引き摺りながら席を探して右往左往した。今回は、乗車の際に係員が入口で案内してくれて(1等車だけか?)難なく指定の席へ。さすがに2等車のぎゅうぎゅう詰めとは違う。乗るなら1等車だ。

シャルル・ド・ゴール空港駅を出た後、パリ北駅には止まらず(と思っただが、パリ北駅を通過する便なんてあるのか?)、Little Europe駅で進行方向が逆向きになった。2両編成の前半分が切り離されたのだろう(と勝手に思っている)。

19:08、明るいうちにパリを出たThalysは、ブリュッセル南駅に着いた20時40分頃にはすっかり暗くなっていた。前回の印象と同じく「怖い」駅だ。少なくともプラットフォームはそうだ。だから夜に到着するのは嫌いなのだ。けれど階段を下りた駅構内は明るい。

ホテルは中央駅のすぐ近くだ。隣の中央駅まで各停電車に乗ればいいのだが、荷物もあるし疲れた。タクシーにしよう、と一緒に来た水素の人と合意。ただし、彼のホテルは少し郊外にあるらしく、別々のタクシーだ。

例によって改札などなく、いつの間にかコンコースに出てタクシー乗り場に向かう。以前と同じく暗くてやや不気味だ。だから夜に到着するのは嫌いなのだ。

客引きが妙な発音で連呼しながら近寄って来た。おかしい。水素の人はその客引きに急かされるようにバンに乗り込む。僕はタクシー乗り場と書かれた場所でタクシーを拾う。あの客引きはいわゆる白タクではないか。大丈夫かなあ、水素の人。(…と思うだけで、強引に引き留めなかった自分が情けない。)

³ パリコレ。「パリ・プレタポルテ・コレクション」は3月に秋冬コレクション、10月に春夏コレクションを開催発表。「パリ・オートクチュール・コレクション」は1月に春夏コレクション、7月に秋冬コレクション、男性服コレクションも同じく2月と7月に開催。

タクシーは黒の高級そうな車で清潔だった。ホテルは以前も泊まった街中にある La Madeleine だ。相変わらず旅行書の写真とは大違い。こういうのを羊頭狗肉というのか。

Hotel La Madeleine
Rue de la Montagne 22
www.hotel-la-madeleine.be

位置的には市中心街の極めて至便なところにある。イビスやノボテルといったホテルやカフェが囲むエスパニョール広場に面し、欧州最古(1846)で有名な、高級チョコレート店などが並ぶアーケード、ギャラリー・サンデュベールはすぐ裏手、シーフードを売り物にレストラン街が軒を並べるイル・サクレ地区、そしてかの有名な市庁舎広場グラン・パレスが歩いて数分以内である。世界三大がっかり観光名所の小便小僧の像もすぐそこだ⁴。

それから中央駅は歩いて5分、芸術の丘もすぐそこで、前回来た時は散策した。

チェックイン。どーも、6年前に来た時と同じの男がそこに座っていた。部屋は131号室。このホテルでは131号室は1Fではない。3F。廊下は入り組んでいるうえに、部屋番号がどうかなっている。131号室の隣は137号室だ。ゴルゴ13じゃないが、部屋に入ったら建屋の非常口までの経路を確かめたくなる。

部屋は、コンクリートに囲まれた中空空洞部分



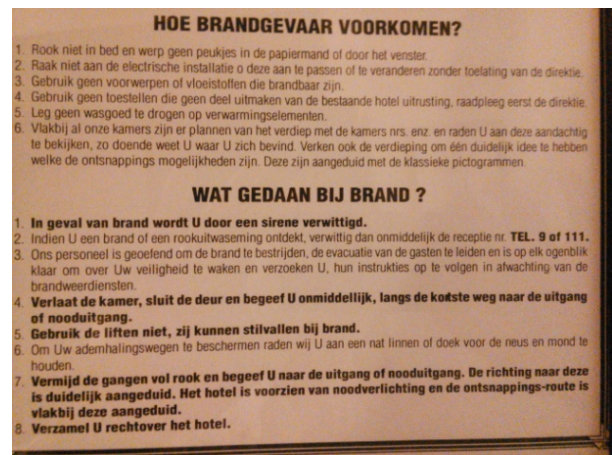
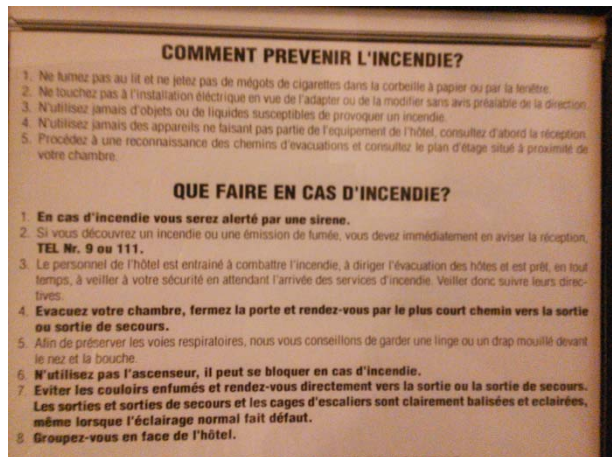
に窓が開き、左の写真のように簡素そのもの。テレビだけが新式でやたらに目立つ。

これで1泊100ユーロ。パリと同じくブリュッセルもホテルは高い。1泊60ユーロで予約したと言う、同じ会議に出席した同僚のホテルは、部屋も風呂も朝食もひどいらしい。ホテルは「快適さ」を売っているのだ。



ともあれ荷物を解き、深緑色のペンキを塗った木造のロッカーの中に、日本のクリーニング屋でくれる針金のものの方がよほどましと思えるハンガーなど不揃いのハンガーにシャツとズボンを掛け、日本円の財布や鍵類はこのロッカーの中に不似合いに鎮座まします貴重品用の金庫に入れ、明日からの仕事に必要なだけの書類を取り出し、パ

⁴ 小便少女の像もある。エイズ撲滅キャンペーンの一環で作られたらしい。愛嬌のある小便小僧に比べ、小便少女像はしゃがんでいかにも写実的でリアル。柵に入れられているのはいたずら防止？



ソコンを出してメールチェックを始める。いつもの光景だ。Wi-Fi 接続のためにユーザーID とパスワードをチェックインカウンターにもらいに行く。接続料金は1時間で1ユーロ、24時間で8ユーロ。

壁には4カ国語で何やら表示してある(上の写真)。どうもベッドでたばこを吸わないようにというようなことが書いてあるのだろう。一番上はフランス語だろう。その次がフランス語系の何語かだ。下二つのうちどちらかがドイツ語で、残りがドイツ語系の何語か。

ベルギーの言語の複雑さは有名だ。以下も Wikipedia による。ベルギーの国土は使用言語により3つの言語共同体に分かれている。

北部のフランデレン地域はフラマン語(オランダ語のベルギー方言)共同体に属し、オランダ語が公用語である。フランデレン地域は経済的に裕福であり教育レベルが高いため、大抵のフラマン人は、老若男女を問わず、フラマン語以外にもフランス語と英語を習得している。

南部のワロン地域は大部分がフランス語共同体に属し、フランス語が公用語である。ベルギーのフランス語は発音・語彙に若干の特徴があるが、フランスの標準フランス語とほとんど同じである。ただし、標準フランス語のほかにワロン語と、フランス語のいくつかの方言も広く話されている。また、南東部のルクセンブルク国境地域ではルクセンブルク語が話されている。ワロン地域は経済

的に貧しく、教育レベルも低いいため、住民は外国語に弱く、オランダ語はもとより英語話者も非常に少ない。ワロン地域では若者であっても英語がほとんど通じない。ワロン地域の北東ごく一部のドイツ国境地域はドイツ語共同体に属し、ドイツ語が公用語である。

人口の比率で言えば、オランダ語が約 60%、フランス語が約 40%、ドイツ語が 1%未満である。

首都ブリュッセルはオランダ語の使われるフランデレン地域に囲まれているが、フランス語話者が 8 割以上を占めていて、フラマン語共同体とフランス語共同体の双方が自治権を持っている。

気が付くと水戸で早朝眼を覚ましてから 23 時間起きたままだ。胃も時差ボケで夕食など食べる気もなく、シャワーを浴びて寝る。1 日目が終わった。

9月9日（月）

仕事初日。

浴槽のカーテンが短くて、シャワーを使っている間に裾が浴槽の外に出てしまう。何が起るかは容易に想像がつくと思うが、床に水たまりができてしまった。

朝食は 7:00 から。コンティネンタルのバイキング版というか、最近はどこもそうだ。パンが 3, 4 種類、コーヒー類、ジュース類、シリアル類、まずそうな果物。3 度も食べれば飽きるなど思いつつ、結局ここで木曜の朝まで 4 回食べた。

荷物を持ち、いざホテルを出てハタと気付いたのだが、会議の会場がわからない。駅の近くの何とか「会議場」だ。とにかく鉄道の中央駅に向かう。中央駅の駅舎と駅舎に続く建物、日本で言えば駅ビルは改装されて以前とはすっかり変わりモダンになっていた。駅舎は石造りでこれを残したまま内部は改装され、カフェなども。

ブリュッセルは街中でも起伏に富んでいる街のようだ。駅舎は小高い丘の部分にあり、駅の前に出るとそれがわかる。だからといって肝心の仕事場がどこか見当がつかない。駅の周りを歩いて見たが Congress などという表示はない。そして、残念ながら、日本の都会と違って、この駅の周りにも駅構内にも周辺地図なるものはない。少なくとも僕にはみつからなかった。同じ会議に出る同僚の携帯に電話しても応答なし。

仕方なく、ダメもとだが駅前で通勤客に訊く。知らなくても、親切に「そうねえ、ここを降りて向こうの広場に行けば Info があるはず。そこで聞けばわかるはずよ」と女性が教えてくれる。でもそんなのは大抵当てにならず、行ってみたらやっぱり Info ブースなどは見当たらない。あつたとしても朝のこの時間から開いてないだろう。歩いている男性に聞いてもわからない、どうしようかなあ、と歩き方はトボトボになる。とにかくこの辺りには違いないのだ。

道を渡り、今度はいかにも通勤客ではない、つまり地元の人ではないと思われる男性に訊いて見る。「会議場？いやあ、わからないなあ…。\$!#&*>? (←会議名) か?」「YES!」「そりゃここのだよ」。

SQUARE。そうだ、何とか会議場という名称ではなくて、その会議場と商業施設が入ったこの大きな L 字型の建物およびその敷地を SQUARE と呼ぶのだ。



左の写真は会議場 3F から撮った、階上入口方向の絵。遠くに見えるのは、結局訪ねなかったが、おそらくはサン・ミッシェル大聖堂だろう。

写真左側に見えるガラス張りの下が正面入口だ。レジストレーションのある 1F へはスロープを下って行って建屋に入ることになる。

入ってすぐ右にレジストレーションデスクがあり、女性たちが 3, 4 人ゆったりと対応している。中で一番きれいな人に声を掛け、エントリー…といけばいいが、実際は講演者かどうかとか氏名のアルファベットで担当者が分類されている。視力がとても悪いので、近づいたらそうでもなかったということは頻繁にあるのだが、今回はとても綺麗な人でした。もっとも、それより、僕の下手な英語を一生懸命理解しようとしてくれたので助かった。

外国でのこういった会議では、「居るところがある」というのが何とも嬉しい。小さな丸テーブルを囲んで 2, 3 人ずつが立ったまま、コーヒーを飲みながら話したいというとき実に快適だ。そういうスペースがさりげなく用意してある。日本の学会だとなかなかこういう雰囲気にならない。

メイン会場では、会議の正式開催時刻まで、おそらくプロの 3 人組グループがジャズを演奏して集まって来る参加者を歓迎している。開始予定時刻を過ぎてもこの演奏は終わらない。会議は一体いつ始まるのだろうと、口には出さないが皆思いながら暗闇の中で拍手をする。半時間くらい遅れか、いかにもジャズを邪魔しに来たかのようなお偉方が壇上に現れ、徐に仕事が始まる。

昼食は、展示やポスターセッションが催される地下 2F の大広間で出される。ここでも脚の長い小型の丸テーブルがたくさん置かれていて、3, 4 人ずつが集まって、おそらくは僕みたいに馬鹿話に興じることなく、小難しい話を皆はしているのだ。

ともあれこの簡単なスナックが出るビュッフェスタイルのランチはいろいろ「使いで」があって、僕にとっては好印象。今後の参考にしよう。

U 部門長に出くわす。忙しいだろうによく出張に出て来られたものだ。

夕食は、雨の中、T 中先生と同僚の T 川君と待ち合わせて、イロ・サクレ地区へ。ブリュッセルはヨーロッパ指折りの「食の都」で、その食文化がここに凝縮していると観光書には書いてある。さしずめ「食い倒れ」だね。前回行ったシェ・レオン (Chez Leon) は健在。そのときみたいにムール貝とビールとフライドポテトとワッフルという、いかにも観光客向きのコンボを試そうとしたのだが、T 先生の一言で結構高級そうな店へ。ベルギーと言えばビールだと、旨いまずいなどわからずビールをお代わりし、チキンを食べ、ムール貝に手を伸ばす。一人 70 ユーロくらい払ったが、1 ユーロが 137 円換算では 9 千円超か。結構なものですな。

寒い中鼻水をすすりながらホテルへ。

9月10日(火)

仕事 2 日目。朝一番にセッション座長、休憩中にパネルディスカッションの打合せ@昼食会場、その後自分の発表、そしてパネルディスカッション。緊張の連続だったが、今回の出張の用務のかなりの部分がここに集中していた。それにしてもあのセルゲイ君の英語はさっぱりわからなかった。僕だけかと思っていいたら日本人は結構皆わからなかったらしい。だからと言って「よかったよかった」とはならないのだが。

午後別のセッションを聴きに行く。ある化学物質を極低濃度まで迅速に測定できる報告がカタールからあった。各国における濃度の一覧表が示されたが、その中でシリアだけ他国に比べて 1 桁程度図抜けて濃度が高いのはなぜだ。物質的には無関係と思われるが、ちょうどこの頃シリアが化学兵器を使用した疑惑が新聞紙面を賑わしていた頃。われわれ素人はつつい妄想してしまう。

ひととおり仕事を終えて、T 先生と同僚 2 人とホテルの近く、エスパニョール広場に面するビアホールへ。ビールとともに出されたコースターには教会らしい挿絵と「Tongerlo」の文字。有名なビールの商標らしいね。ここを出て一息入れて夕食はまたもやイロ・サクレ地区へ。昨日では不満足だったのだ。昨夜よりは少し庶民的な店へ。

先のカフェで飲んでいるときから話題になっていたのだが、ベルギーという国は一体何で「食って」来たのだろうか、どうやって生きて来たのだろうか。大国フランスとドイツに挟まれて歴史上翻弄されて来たに違いないのだ⁵。よほどしっか

⁵ オランダ、ルクセンブルクとともにベネルクス 3 国と呼ばれている。「ベネルクス (Benelux) は、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの 3 か国の集合を指し示す名称。この 3 か国はいずれも立憲君主制を採用している。周辺の国に比べて国土が狭く、3 か国すべてを合わせても、国土面積は隣国ドイツの 1/5、フランスの 1/9 程度に過ぎない。そのため、この 3 か国は大国に対抗するために緊密な経済協力を行っている。3 か国は共に

りとした独自のものをもっていないとあつという間に蹂躪されそう。

会議冒頭の主催者側の挨拶で、ベルギー人が「ベルギーは 1 年に何十万トンものチョコレート輸出して世界に貢献している」と笑いを誘っていたが、チョコレートやビールやレースではないだろう。アントワープは「ダイヤモンドの都」と呼ばれているらしいが、ダイヤモンドの研磨が得意ということ⁶。観光収入は確かに大きいでしょうな。一度ベルギーの近代史を読んでもみたいものです。

この 2 日間、さすがに U 部門長はイロ・サクレ地区のような、食い倒れの的などころへは行かず、おいしいものを求めてひとりで出掛けた様子。

9月11日(水)

仕事場で昔少し調べた分野のパネルディスカッションを聴く。あまりぱっとしなかった。

夕方。今日は会議主催のディナーだ。カンファレンスディナーを由緒ある「王立美術歴史博物館」で行うというのだ。会議場の前からバスに乗り、東へ向かう。到着した頃にはすでに暗くなっていたし、高い木々が立ち並ぶ大きな公園のような中だったので周囲を眺めることもできなかったが、凱旋門を挟んで向かって左側が「王立軍事歴史博物館」、そして右側がこの「王立美術歴史博物館」らしい。この公園は 37 ha もあるサンカントネール公園という。

閉館後の建屋の中に案内され、ミュージックショップや、展示物の間を過ぎて、階上に用意された席に着く。どうやらそこは大展示室の 2 階部分を巡るギャラリーらしい。10 人掛けくらいの丸テーブルに日本人 3 人でかたまつて陣取る。

国立の博物館が、閉館後に、百人近い参加者の食事をサーブできるのだ。酒が入るパーティを博物館で行うのだ。日本だったら酔って陳列物を壊す不届きものが間違いなく現れる。それを心配して公共機関が団体の晩御飯に会場を貸し出したり

欧州連合 (EU) の加盟国であり、ブリュッセルやルクセンブルクは EU の政治的な中心都市でもある。「ベネルクスには約 2,720 万人の住民が住んでいる。」「3 か国は歴史的に常に密接な関わりを持っていた。3 か国の領域は、かつてはネーデルラント (低地地方) と呼ばれていた。歴史的には中世末期にいずれもブルゴーニュ公国の支配を受け、近世初頭にはともにハプスブルク家領に入っていた。(中略) 3 か国の緊密な関係は、1948 年にベネルクス関税同盟が調印されたことにより始まる。1960 年には関税に加え、労働力と資本を自由化したベネルクス経済連合が発足し、欧州共同体の起源となった。」(Wikipedia より)

⁶ アントワープ中央駅のメトロ駅はダイヤモンドを意味する「デイマンテ Diamont」で、周辺には関連業者が集まっているらしい。アントワープ (英語表記。フランス語ではアンヴェルス) は、ヴィーナスで有名な画家ルーベンスや「フランダーズの犬」で有名なノートルダム聖堂で知られる北部ベルギー・フランドル地方の中心都市でベルギー第 2 の都市。人口 46 万人、仙台程度の大きさの街。ベルギーからは 50km 程度。「夜警」で有名な光と影の画家は、ルーベンスではなく、レンブラントか。レンブラントはオランダ人。



はしないだろう。

このような公共施設を催しの一部に使用するのは外国では見掛ける。20年ほど前にサンフランシスコで参加した集まりでは、かのモンレーベイ水族館でポスターセッションがあった。モンレーベイ水族館は、今ではどこの水族館でも当たり前になっているが、海底の一面を切り取って来たかのような自然状態を維持した展示を世界で初めて行ったことで有名だ。その動物園版が旭川動物園だと僕は勝手に思っている。

同じテーブルには、昨日発表していたカタールの男性とその奥さん、そしてカタールの男性に話しかけているおしゃべり好きのアメリカ人。そのアメリカ人が話やめない。奥さんはひとり放っておかれる形になっている。こういうとき、気を利かせたつもりで話し掛けていいものかどうか、文化が違うと判断がつかない。

若い男が各テーブルを回って手品を披露する。ひととおりデザートまで食べ終わったところで、われわれ日本人3人は先にお暇することにした。UさんとGさんと暗闇の中を歩きだす。博物館のあるところは高台になっていて、下る方向に歩いていけばそれが西の方角で市街地に向かう。

暗くて小雨模様の夜の公園内をひとりではとても歩く気にはならないなと思いつつ、中年の野郎3人が連れ立って歩く。まもなく大きな通りが出る。それがロウ通り。ブリュッセルは小さな街だ。ここはどこだとキョロキョロしながら歩いているうちにメトロのアル・ロワ駅を左(南)へ折れ、ベリヤール通りを右(西)へ折れ、大きな公園の中を歩いていると思ったらそれがブリュッセル公園だ。

公園西側のロワイヤル通りを横断すると、大きな銅像があり、石段を降りて行く。左側にだらっ広いカフェを見ながら、つき当たりが中央駅だ、と最初はわからず、ここはどこだと迷った。駅だとわかればホテルまでは簡単。駅から緩やかな下り坂を辿ればエスパーニュ広場だ。

9月12日(木)

4日間の国際会議の4日目。

今日も雨模様で肌寒い。

今日はパリまでの電車切符購入と土産探しと、それから午後はパリへの移動。

朝早く中央駅に向かい、パリまでのTGV(タリス)を予約する。

券売機(近郊駅用)では当然売っていないので、窓口で並ぶ。5、6人の列の後ろについて自分の番が来て、あらかじめ頭の中で考えていたようにスラスラと希望列車を告げる。「それは国際線なのでこの窓口ではない。脇の観光案内所へ行け。」

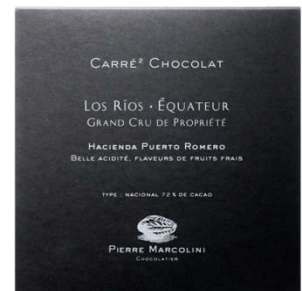
行きのパリと同じことを繰り返してしまった。ともあれ、隣の事務所の、今度はとても紳士的な係員から切符を購入。15時半頃のブリュッセル南駅発にした。パリまでの所要時間が1時間半程度と考え、パリで夕方のラッシュが始まる前に到着してしまいたい。

切符のあとは、今回珍しく、お土産探した。チョコレートを買う。我が家は基本的に土産は実質禁止状態である。そんなセンスの悪いものを買ってくるのではないということで、いきおい、そのうち消えてなくなるもの、つまり食べるものになるが、それも帰宅してから僕が食べることになる。しかし今回は注文を受けて来た。大阪に住む甥っ子の結婚記念もあるし、横浜に住むもう一人の甥っ子夫婦にも。それに何と言ってもブリュッセルと言えどチョコレートですからね。ここはお上りさんになりきってガイドブックを持ちながらチョコレート屋さんへ。

注文されたのはヴィタメル(WITTAMER)とピエール・マルコリーニ(Pierre Marcolini)。それ以外にもベルギーにはゴディヴァ(Godiva)、ノイハウス(Neuhaus)、レオニダス(Leonidas)などがある。Godivaのように日本ですでに知名度が高いチョコレートもあるが、日本で買うとすごい高いんだねえ。ベルギーでは半値くらいのイメージ。それだけでも買ってくる価値はありそう。

ヴィタメルとピエール・マルコリーニは必須。ヴィタメルは上の写真のように、鮮やかなピンクで有名。ピエール・マルコリーニは下のような黒が基調。ともに中央駅から南西の方向で、直線距離で500メートルくらいだから歩いてすぐだ。小さな街だ。

中央駅からブリュッセル公園へ向かって昨夜歩いた道を行くと例の大きな銅像に到達。昔々の治世者らしいがフランス語は全く読めない。まだ9時頃で通勤の時間か、それらし



い人が行き交う。寒いので吐く息が少し白い。

ブリュッセル公園脇のロワイヤル通りを南下する。まもなく左手にいかにも古いが権威がありそうな建物が見え、見上げると奥には目を見張る大きな建物がありそう。王宮だ。(だからロワイヤル通りと言うのだらうね。)その前のロワイヤル広場では、中央の騎馬像を挟んでトラムの上下線の線路が左右に膨らむ。像は第1回十字軍の指揮官のひとりだと。

18世紀の建物が並ぶこの辺りはあつという間に過ぎ、サブロン教会の脇を斜めに入る。「ノートル・ダム・デュ・サブロン教会」。ロワイヤル通りに背を向けて立っており、教会の前がグラン・サブロン広場。広場はそれほど大きくはなく駐車場



になっていた。観光書によれば「気高い装飾の妙 ブラバン・ゴシック 15世紀にたてられたゴシック様式の教会。建築物としても貴重。

重。夕暮れ時、スタンドグラス越しに見る教会の灯りは美しく幻想的。暗くなると建物全体がライトアップされ、市内で最も美しい教会と言われている。18世紀のパイプオルガンが現存。「(ブラバン)は現在のベルギーとオランダにまたがる一帯の地名ブラバント、ブラーバント (Brabant) のフランス語読み)。

そんな有名な教会とは露知らず、教会を横目にサブロン広場に面するヴィタメール⁷へ。小じんまりした店で、観光地みたいにチョコレートの種類が多いわけではない。すっきりした店。グラン・プラスの周りの店みたいに kg いくらの量り売りはさすがにしてなさそう。アソーテッドは自分で選べるが、面倒なのでサンプルを指さして「これと同じのを」と2種類注文。それとオレンジピール。東京は本郷の「オランジュショコラ ジャンヌ」のオレンジピールに勝てるでしょうか？オレンジ以外にジンジャー(しょうが)のピールも試しに買ってみる。締めて EUR 80.80 (11,000円)。

次はピエール・マルコリーニ⁸だ。すぐ近くにある。ヴィタメールの店から直視はしないが、サブロン広場から覗くように見ると路地の入口にある。だから行こうと思えばすぐに行けるのだが、ここで躊躇する。ヴィタメールの紙袋が大きくて、あのピンクがやたらと目立つのだ。見れば瞬間ヴィタメールとわかる。これを手に提げてピエール・マルコリーニに入れと言うのか。僕には出来ない。

⁷ http://www.wittamer.com/documents/gift_2012_2013.pdf

⁸ <http://www.marcolini-eboutique.com/en-gb/>

そこで一旦ホテルへ戻ってピンクの紙袋を置くことにした。ここからの戻りは来た道のロワイヤル通りではなく、裏道というか、古い街並みのやや狭い道に戻る。何ということはない、ほどなく中央駅前の通りであるアンブレール通りに出る。

ホテルまで戻ったのは、ピエール・マルコリーニならホテル裏手のギャラリー・サンデュベールに入っていることを知っていたからだ。買う物は決まっていたので早い。TABLET と呼ばれる、ときにココアが入ったチョコレート。16個入りをひとつ求め、これは職場に。それからここでも試しにオレンジピールを。二つで EUR 26.30 (3,600円)。

同じ並びのノイハウスとゴディヴァはパス。何とか言う賑やかな店も覗いた。レオニダスは少し離れたイロ・サクレ地区に近いところにあるが、ここもパス⁹。チョコレートは買い終わった。

ギャラリー・サンデュベールには、他に高級そうなカフェや美術書店などが並ぶが、おもちゃ屋もあった。ウィンドウを覗くと、見覚えのある絵が浮かんで見える、透明な半球の形のペーパーウェイトが目にとまる。あとで調べてみるとアルフォン・ミュシャ (Alfonse Mucha) という画家とのこと。右のような絵で有名な人です。これが彼の出世作らしい。作品一覧は、たとえば次のサイトで見る事が出来ます：

<http://www.abcgallery.com/M/mucha/mucha.html>

別の店でマリアージュの紅茶も見つけたが (v)、我が家好みのマリアージュ・マルコポーロは見当たらなかった。マルコポーロは日本人好みだが、外国ではそれほどではないらしく、以前パリの友人に買ってきてくれと頼んだが見つからなかったようだ。



⁹ 帰国後、荷物をほどこき、会議でもらった袋の中にあつた小箱を開けてみてびっくり。レオニダスのチョコレートだ。それもぎっしり入っていて、小箱はずっと重い。さすがにベルギー、とこういうところで感心。



さて、これで買物は終わり、このギャラリーの反対側(←)を抜けてみる。左に折れてまもなく広場に出る。その前に立っている立派な建物がモネ劇場で、広場はモネ広場。モネ劇場はベルギーにおけるオペラ、音楽、バレエの殿堂。1,700年建築らしいが、地震のないことの幸運ですね。

ここから「食いだおれ横町」イロ・サクレ地区をグルッと外回りし、ホテルに戻り、荷物をまとめてチェックアウト。部屋代は先に楽天を通じて払ってあったので、ここではWi-Fi代とペットボトルの水2本代、確か合計EUR 11.50。

パリ行きはTGVまではまだ時間があるので、荷物は預けたままにして昼食に出掛ける。

まずは現金を求めてATM探し。グラン・プラスの無人ATMは、事前に調べたどなたかのウェブサイトにあったように、壊れていた。適当に歩いて見つけた銀行で現金ゲット。実は中央駅の近くにあると聞いて、駅の周辺や地下街やらを探し回ったのだがみつからなかったのだ。歩数は随分稼いだ。帰りにすぐ近くの土産物屋で絵葉書10枚。絵ハガキ買いいつもの癖だ。使っちゃうからね。

さて、昼食。ホテルの並びのカフェでとろう。まだ正午には早いので客はまばらだ。店前のテラス席のひとつに一人陣取る。他には2組程度。フライドチキンハーフとビールとエスプレッソで計EUR 19.90 (2,700円)。まあ、B級グルメとして満足。

…なのだが、ここで見てはいけないものを見てしまった。食べている最中から、やせ細った白人の30歳代に見える女性が小銭を集めて来っていた。何を言っているか皆目わからないが、食べるものがないと言っていることは仕草からわかった。2度3度とやってきたが誰も相手にしないし、僕もしなかった。

何度目かに、僕の後ろの、店先にある3人が座っている席に近づいていった。そして食べ終わって皿に残していたであろう、僕が注文したと同じチキンを右手で鷲掴みにして持ち去ったのだ。こちらに背を向けて座っていたポロシャツ姿の男性は何も言わず、手を伸ばした彼女の方に顔を向けることさえしなかったし、一言も声を掛けなかったように見えた。彼女はそのチキンに噛みつきながら歩いて行って、その後姿を現さなかった。目を凝らせばここブリュッセルにもホームレスはいらるだろうし、どこの街にも経済弱者がいないわけではない。けれどこれほど露骨な「格差」を目の当たりにしたのは驚きだった。吐き気がしてきた。

食べている最終だったら、そのまま食事を続けたらどうか。

さて、これからパリに移動である。ホテルに預けた荷物を取り、中央駅へ向かう。TGVへ乗るには隣の南駅まで行かねばならないが、南駅までの運賃はTGV代に「込み」である。だからこの一駅分の切符を買う必要はない。時刻表をみてプラットホーム番号をチェックし、地下へ。13:45発の各停に乗る。

南駅のTGV乗り場は、日本と同じく階上にある。エスカレータで上がるとそこにタリスが入っていた。予約した列車より1本か2本早い。駅員にチケットを見せて、乗れないか聞いてみた。「たぶん空いているだろうからいいよ」。

今度は往路と違ってパリに着くまで明るい。ぼんやりと窓外に目を遣りながら1時間20分が過ぎる。今回はパリ北駅(Gare du Nord)まで途中停車駅はない直行だった。降車駅はシャルル・ド・ゴール空港駅。ここでフランス国鉄の郊外電車RERに乗り換える。

目指すFantenay-aux-Roses(フォンテネ・オ・ローズ)駅は、空港駅からEUR 1.70と安い。距離は遠い。ここパリの北の郊外から大都市パリのど真ん中を南へ突っ切り、パリ市を過ぎた別の市にある。空港駅ではプラットホームを探し当てるのに少し苦労したが、無事B2 Robinson(ロバンソン)行きに乗る。

さすがにパリを過ぎると乗降客は少なく、フォンテネ・オ・ローズ駅では10人程度が降りたのみ。駅舎(→)は古いが中は新装されており、無人駅。降りたのはいいが、ここで困ることになる。

このところ何回かは、先方の知合い(デルフィーン女史、Delphine)がパリ市内まで、あるいははるばるシャルル・ド・ゴール空港まで迎えに来てくれていたのが、子供が出来てからは1時間もかけて迎えに来る余裕はさすがになく、今回は「最寄りの電車の駅まで行くから」と僕の方から伝えていたのだった。しかし、何年前に一度この駅を利用したときの記憶では、かなりの田舎駅で、タクシーなどが待っている駅ではなかった。バス路線もない。

実際に降りてみて不安は的中。タクシーなどいないし、来そうにない。Delphineに電話すれば迎えに来るだろうが、彼女に迷惑をかけまいとしてここまで来た、ホテルまでは自力で行こう、と思っていたので、軽々にヘルプを求めたくない。



途方に暮れる。

しばらく悩んでウロウロした挙句、駅の目の前にあるカフェでタクシーを呼んでもらおうと入る。

無駄だった。元気な女性主人はきれいなフランス語をしゃべるが(よくわからないがきれいなんだろう)、フランス語しかわからない。さすがに「タクシー」はわかっただろうが、「呼んでも来ない」というような表情だった(と思う)。(時々思うのだが、英語を解さない人に向かって懸命に英語をしゃべろうとするのは英語劣等感のせい?)

ところが、そばの席に座ってマッキントッシュのノート PC を操作していた、太っちよで人なつこそうな中年男性知り合い客がいて、彼女は彼の何やら話しかけた。そうしたら彼は僕に目的地を聞き、女主人と二言三言話した後、「それならばバスだ」と言い始めた。そして、親切にも二人で、(おそらく)「駅の脇の長い階段を上がって行くと、線路をまたいでいる広い道に出るから、その道沿いでバス停を見つけるがよい」というようなことを身振り手振り付きで説明してくれ、手元の小さなメモ用紙に、極めてわかりやすい地図を描いて渡してくれた。

ありがとうとだけ言ってカフェを出る。線路の脇の階段は見知っていた。青くてここから見上げる位置にある道路まで延々と長い階段だ。荷物をもって歩いていく気にも、すぐ近くであろうホテルまでバスに乗る気にもなれない(フランスでは空港-ホテル間のシャトルバス以外バスに乗ったことはない)。それにどこで降りたらいいかもわからない。

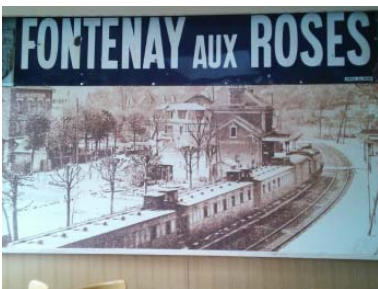
もう一度途方に暮れる。

仕方がない、デルフィーヌに電話をした。「タクシー来ると思う?」「No.」ということで、30分待ってくれ、迎えに行くから、と。駅前のカフェで待っていてくれということで、もう一度さきのカフェに入る。再見。

「ここで友達を待つことにした」と、わざわざ英語で言わなくてもいいことを言い、コーヒーを注文する。

トイレでヒヤリ。入って内側でドアに鍵を掛けたのだが、出ようとしたところ鍵が開かない。立てつけが悪くて力任せにすればはずれそうだ。ガタガタガタガタとやっているうちに音を聞きつけた彼女が外から開けてくれた。すごく匂うトイレで、一刻も早く脱出したかったのだ。

店内の一方の壁には下のような昔の写真がかでかど飾ってあった。昔の駅舎と列車の冬景色だ。別の写真には石炭を運んでいる列車が写っていたように思うが、石炭産業の何かの基地だったのだろうか。Fontenay-aux-Roses、バラの泉という名前と合わない



いな。

などと思いながら待つこと久しく、何本かの列車からバラバラと客が降りて来ては、そのうちの2, 3人がこのカフェに入ってくるのを見ているうちにデルフィーヌがやってきた。コーヒーがいくらかわからないので聞いてもらう。無粋な値段表なんて張ってないし、メニューもないし、女主人に聞いてフランス語で答えてもらってもわからないしね。

まずホテルへ。前回来た時に初めて宿泊したホテルで、職場に実に近い。歩いて10分程度だ。

ibis budget Chatillon
Zac Les Sablons/ lot C
111 Avenue de Verdun
92320 Chatillon
France

Chatillon (シャティヨン) はパリ市の南に隣接している地域で、市の名前か。ホテルチェーン ibis は「budget」というブランド名で経済的ホテル、つまり安いホテルを経営しているのだろう。確かに安い。パリ市の外だからということも大きいだろうが、ダブルベッド1台のスタンダード客室、朝食付きで EUR 67.95 (9,400円) は格安の感。

部屋のキーはなく、チェックインのときに渡される領収書に部屋番号とそれに対する6桁の番号が記されている。その番号を部屋のドアについているプッシュボタンで入力する。だからこの領収書は持ち歩かないといけない。

最近改装したから部屋は綺麗だが、実に無機質で冷たい。寒い時にしか泊まったことがないからおさらそう思うのだが、シャワーしかない部屋には最近慣れたとは言え、それでも「冷たい部屋」のイメージ。まあ、1泊だけだからね。

まだ明るいが早速デルフィーヌと夕食に出掛ける。今回も彼女は息子・ロリスを元カレに預けてきている。

ビール好きの彼女は、いきなり食事に行かずにまずはカフェに寄る。テラスでビールを飲むのがいつものパターン。それから向かったのが前回連れて行ってもらったピザ屋さん(→)。このピザは旨い。

ここまででいい加減食べたのだが、またまた例によってもう1軒行くのだ。終始ロリスと付き合っていて、口には出さないが、たまには夕食くらいには呼び出して欲しくて仕方がない、という様子が伝わってくる。彼女の車の運転は、僕から見るとすさまじくうまい。助手席に乗っていて感心する。パリやパリより南のラテン系の国々では皆うまくなるのだろう。



比較的狭いが夜いつまでも賑わっているような飲み屋で、何とかという飲み物を一杯だけ飲む。向いは古い映画をやる映画館。金曜の夜でもないのに店は学生っぽい若者であふれていた。

9月13日(金)

安い典型的なビジネスホテルだけあって、この朝食はホントーに簡素だ。僕が経験した今までのホテルで最高に簡素で、手を抜いている。

ホテルをチェックアウト。荷物は預かってもらう。歩いてデルフィーヌの職場に向かう。今日の打合せ相手は彼女ではなく、彼女の部下たち。

午前中打合せ。昼食はいつものレストランで、5人と同席。午後からはほとんどフリーになり、小さなブースを宛がってもらい、フロアのコーヒーマーカーのエスプレッソをがぶ飲みしながらPCに向かう。

夕方5時過ぎ、ほとんど皆帰宅。彼女に車でホテルまで送ってもらう。彼女は彼女で息子を学校へ迎えに行かなくてはならず、相変わらず大忙しだ。

ホテルでタクシーを呼んでもらってシャルル・ド・ゴール空港へ一気に戻る。夕方、道はひどく込んでいるが、例によってパリのタクシーは車線にはお構いなく走れるところを走る。隣の車とすれすれに走る。途中環状高速道路へ入る手前に、「Judo」何とかと書かれた体育館のような建物を観る。Googleによると *Fédération Française de Judo* (フランス柔道連合?) とか。タクシー代は EUR 82.60 (11,000 円)。そう言えばチップを忘れたような。悪いことをした。

飛行機は23時25分発だから空港でやたら時間があり余っているが、さっさとパスポートチェックをし、荷物検査を済ませ、ナカで待つ。東京行きのゲート L53 は、明るくて綺麗だがこの時間客もまばらで寂しい店が並ぶ通路を延々と歩いた先にある。極東という感じ。

機内生活は特段何も覚えていない。観ようという気になった映画もなかった。

9月14日(土)

18時成田着。今回もまた怪我も病気も盗難もなく無地帰国。今度ベルギーへ行くときは観光で、おいしいものを漁ろう。

1849 発バスで水戸駅へ。

ところで買って帰ったチョコレートのその後である。ヴィタメールのアソーテッドは甥っ子たち夫婦に送り、自分たち用はオレンジピールとジンジャーピールのチョコレートだった。まあ、二度と買わないね。とくにジンジャーは製品にすべきではない。オレンジピールは、ヴィタメールもピール・マルコリーニも、東京・本郷のジャンヌにはかなわない。これが結論。

【付録】

最後に TGV タリスについて。自分のための参考情報。Wikipedia より。

フランス・ベルギー・オランダ・ドイツの4カ国を結ぶ高速列車。ユーロスターと同様、フランスの TGV を基本にしており、電化方式の異なる区間を走行するため様々な工夫が施されている。最高速度は 300 km/h。

1996年1月より運転を開始、同年6月にアムステルダムまで延長、1997年12月10日にケルンまでの系統が運行を開始。運営会社は「タリス・インターナショナル」(*Thalys International*) 社で、本社はベルギーのブリュッセルに置かれている。

フランスのパリからベルギーのブリュッセルを経由し、オランダのアムステルダムおよびドイツのケルンに至る系統が基本である。このほかパリからベルギー国内主要都市に向かう系統が存在する。

最も本数の多いパリーブリュッセル間では、6時から21時台まで30分間隔(一部60分または90分間隔)のパターンダイヤが組まれ、パリ発は毎時01分・25分発、ブリュッセル発は毎時13分・37分発を基本とする。この区間では、行先の異なる編成を2本併結することもある。

主な都市での停車駅は以下の通り

- パリ：パリ北駅
- ブリュッセル：ブリュッセル南駅
- アントウェルペン：アントウェルペン中央駅
- ロッテルダム：ロッテルダム中央駅
- デン・ハーグ：デン・ハーグ HS 駅
- アムステルダム：アムステルダム中央駅
- リエージュ：リエージュ＝ギユマン駅
- アーヘン：アーヘン中央駅
- ケルン：ケルン中央駅

アントウェルペン(アントワープ)では、当初アントウェルペン中央駅が頭端式の構造だったため、アントウェルペン始発・終着の列車以外は中央駅に乗り入れず、アントウェルペン＝ベルヘム駅に停車していた。2007年に中央駅の地下を経由してアントウェルペン市内を縦断する新線が開通したため、同年12月9日からアムステルダム方面行の全列車が中央駅経由になり、ベルヘム駅は通過となった。

ケルン方面行の列車の一部は1998年から2002年までデュッセルドルフまで延長運転されていた。

2007年3月31日まで、一部の列車はパリ北駅ではなくパリ郊外の LGV 東連絡線にあるシャルル・ド・ゴール空港第 2TGV 駅を経由しマルヌ・ラ・ヴァレーシェー駅(ディズニールランド・パリの最寄り駅)を発着駅としていた。

シャルル・ド・ゴール空港第 2TGV 駅はシャルル・ド・ゴール空港と直結しており、エールフランスが就航していたパリーブリュッセル間の路線をタリスが置き換えた。その代わり、タリスの座席の一部はエールフランスの利用枠として確保されていた。その後ノースウエスト航空やアメリカン航空も、鉄道サービスをコードシェアとして利用することに同意し、シャルル・ド・ゴール空港とブリュッセル南駅でサービスが行われていた。このため、タリスは IATA から 2桁コードが指定されており、ブリュッセル南駅にも IATA コードが付けられている。KLM などが加盟する航空アライアンスであるスカイチームはタリスの鉄道サービスを

利用しスキポール空港とアントウェルペン＝ベルヘム駅、ブリュッセル南駅間でコードシェアすることに同意していた。2007年4月1日以降タリスと航空機のコードシェアは廃止され、代わってTGVがシャルル・ド・ゴール空港－ブリュッセル間のコードシェア運行を行っている。

走行区間毎に異なる電源方式に対応するため、タリス-PBA型とタリス-PBKA型が存在する。PBA型、PBKA型とも10両編成で、8両の連接式客車の両端を、2両の動力車（機関車）で挟んでいる。

客車部分は順に一等車3両、ビュッフェ・二等合造車1両、二等車4両の構成である。一編成あたりの定員は377名。

PBA型



フランス・ベルギー・オランダ乗入れ用車両。発着ターミナル駅であるパリ・ブリュッセル・アムステルダムの頭文字から命名された。3電源（直流1.5kV・直流3kV・交流25kV50Hz）に対応する。フランス国鉄のみが、4531型として

10編成を保有する。

PBKA型



フランス・ベルギー・ドイツ・オランダ乗入れ用車両。パリ・ブリュッセル・ケルン・アムステルダムの頭文字から命名された。4電源（直流1.5kV・直流3kV・交流25kV50Hz・交流15kV16 2/3Hz）に対応する。

両端の動力車（機関車）は、2階建てTGV車両であるTGV Duplex型が、客車はTGV-R型がベースである。4カ国の鉄道事業者が保有し、フランス国鉄は4341型、ベルギー国鉄は4300型、オランダ鉄道は4300型、ドイツ鉄道は409型として、それぞれ保有する。計17編成が存在する。

パリ－ブリュッセル間やパリ－アムステルダム間など、ドイツに乗入れない運用にもつく。ICEのエシエデ事故後に、車両不足を補うため周辺各国から車両が貸し出され、代走列車に使用されたが、タリスも貸し出されてドイツ国内を走行した。

